

IVR(Interventional Radiology)について

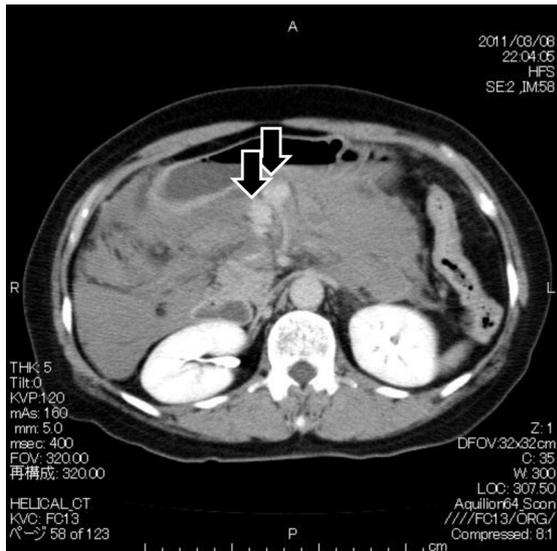
放射線科部長(画像診断担当)：佃 正明

放射線診断の一分野にIVR(Interventional Radiology)があります。IVRは1967年にMargulisが最初に提唱したもので、”Interventional diagnostic radiology. A new subspeciality”というタイトルでAmerican Journal of Radiology誌に掲載されています。種々の放射線診断技術を治療に応用するという新しい分野を1つの専門領域として位置づけ、Interventional Radiologyと名付けでその将来展望を述べています。

Interventional Radiologyは適切は日本語訳がなく、IVRと略するのが一般的で定着していません。内容は種々の放射線診断技術を応用した疾患の治療法であり、非外科的な低侵襲治療として、種々の疾患に対する治療体系のなかで、重要な治療法のひとつとして確立されています。IVRの特徴は、従来外科的手術しか選択肢のなかった疾患、病態に対して、経皮的かつ低侵襲な治療を可能にしたことです。また、簡便で迅速に施行でき、入院期間の短縮と費用の軽減の効果もあるなど、多くの利点を有しています。

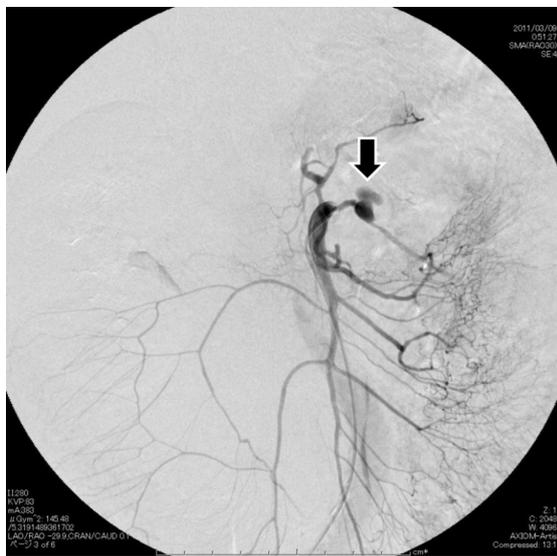
IVRの例として動脈塞栓術がありますが、咯血に対する気管支動脈塞栓術12例、婦人科性器出血に対する子宮動脈塞栓術3例、内臓動脈瘤塞栓術2例で、いずれも動脈塞栓術を施行できました。消化管出血では4例血管造影を行っていますが、破綻血管が判明した1例は動脈塞栓術を施行できていますが、3例は破綻血管が不明で血管造影検査のみで終了しています。

昨年症例のうち、内臓動脈瘤破裂による腹腔内出血にIVRを施行した症例を提示します。

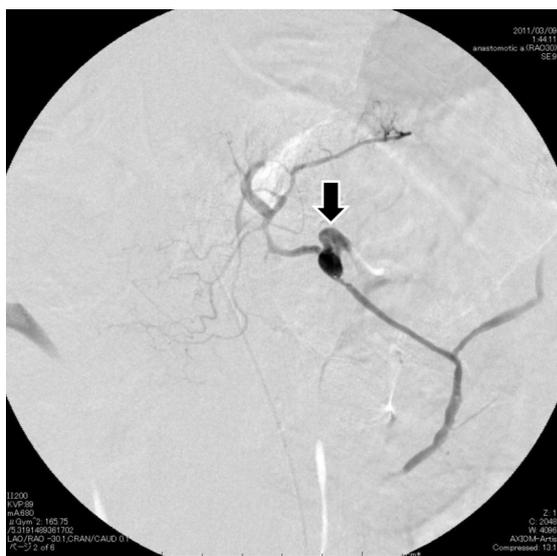


造影CTでは腹腔内に多量の血腫が見られ、上腸間膜動脈近傍に造影剤の血管外漏出像を認めます。上腸間膜動脈の分枝からの出血が疑われました。

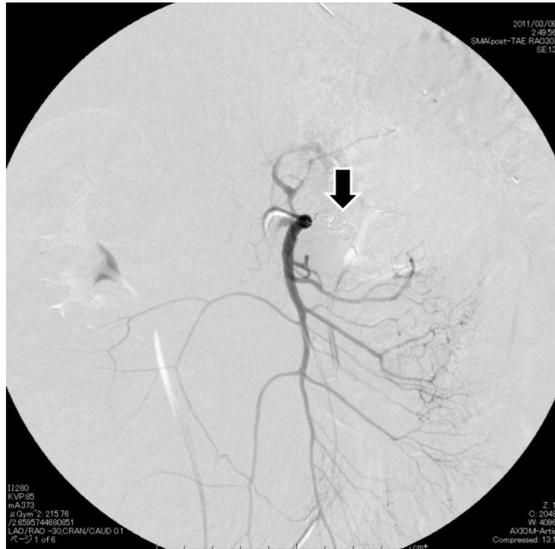
外科とも治療方針を相談のうえ、まず、血管造影で破綻血管の確認、および、可能なら、動脈塞栓術（TAE）を施行することになりました。



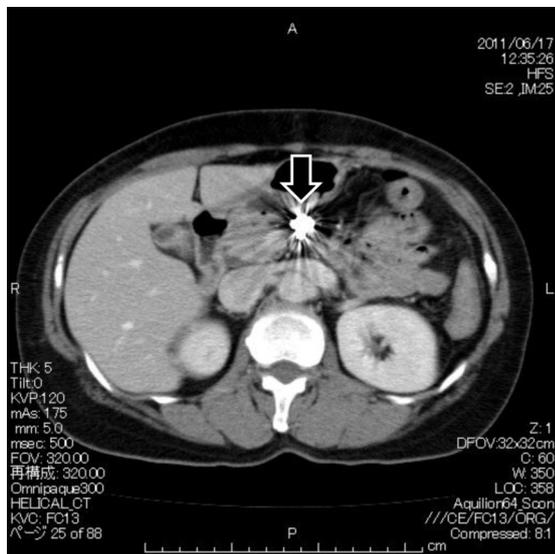
上腸間膜動脈の造影では、中結腸動脈に動脈瘤が見られ、血管外漏出像が描出されました。中結腸動脈瘤破裂の所見です。



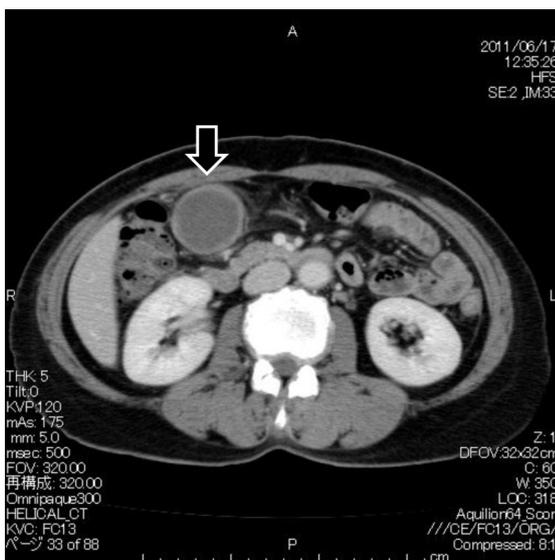
マイクロカテーテルを動脈瘤遠位部の中結腸動脈流出部にまで挿入し、マイクロコイル（TORNADE型）15個を用いて、動脈瘤塞栓術（isolation+packing）を施行しました。



TAE後の上腸間膜動脈の造影では動脈瘤の描出は見られなくなっています。



3か月後のCTです。中結腸動脈瘤を塞栓したマイクロコイルが確認できます。



腹腔内血腫は大部分は吸収されましたが、わずかに小腫瘤状に残存しました。IVRにて上腸間膜動脈瘤破裂は治療できました。

今後も、外科、内科とも連携と取りながら、腹部内臓動脈瘤破裂や動脈性消化管出血に対し、安全に適切に動脈塞栓術を行っていきます。

放射線科部長（画像診断担当）：佃 正明